

箏曲界の巨人 — 宮城道雄



宮城道雄 (写真提供: 桐絃社)

律と伴奏の対比が優れていることなどが特徴です。変奏曲やデュエット、アンサンブルといった西洋音楽(クラシック音楽)の要素や発想も生かされています。

背景として、宮城が早くから西洋音楽に興味をもっていたことが挙げられます。子どもの頃、神戸のレコード店の前で熱心に立ち聞きしていた逸話も伝わっています。そして、模倣ではなく、新しい日本の音楽の創造にどのように生かすか、怠らず研究を続けたことが大きな成果を生みました。

古典作品を蘇らせる

宮城は箏曲と西洋音楽の融合に取り組む一方で、古典曲もこよなく愛しました。そして緻細で緻密、推進力のある卓越した名演奏・名編曲によって、古典作品を現代に蘇らせることに成功しています。

「浜木綿」の詩碑と宮城道雄胸像 (和歌山県白浜町平草原) 宮城道雄最後の作品は、白浜をテーマにした自作の詩に曲を付けた『浜木綿』です。曲の完成披露と詩碑除幕のため宮城が白浜を訪れたのは1956(昭和31)年6月4日で、その20日後に不慮の死を遂げます。詩碑は現在、平草原に設けられた浜木綿苑にあります。

この実績で、宮城の名声は一段と高まりました。

和楽器の改良と考案

宮城は、自らの新しい音楽世界開拓のために、日本の古典的楽器の改良や新楽器開発にも精力的に取り組みました。考案・改良した楽器は十七絃、八十絃、短琴、大胡弓(別名 宮城胡弓)など多数です。そのうちの、低音用の十七絃は、今では邦楽演奏に欠くことのできない楽器となっています。

不慮の死

戦後も活躍を続けた宮城ですが、1956(昭和31)年6月25日、事故で突然亡くなります。京阪神で宮本政雄指揮の関西交響楽団(現 大阪フィルハーモニー交響楽団)と『越天楽変奏曲』を演奏するために大阪へ向かう途中、夜行列車から転

落したのです。救助されたものの、同日中に息を引き取りました。

このニュースはまたたく間に全国を駆け巡り、衝撃を与えました。邦楽界のみならず音楽界全体が深い悲しみに包まれました。

ちなみに“宮城道雄急死”を受け、予定されていた関響との演奏会で急きよ、宮城に代わって演奏したのが、宮城の愛弟子で 桐絃社創立者の須山知行でした。

*参考: 箏曲宮城会発行の諸資料 (マ)

宮城道雄の代表作

*カッコ内は作曲年

- 水の変態 (1909)
- 落葉の踊 (1921)
- 瀬音 (1923)
- さくら変奏曲 (1923)
- 春の海 (1929)
- 数え唄変奏曲 (1940)
- さらし風手事 (1952)
- ロンドンの夜の雨 (1953)
- 尾上の松 *箏手付 (1919)
- 道灌 (1936)
- 日蓮 (1953)
- 越天楽変奏曲 (1928)
- 壺越調協奏曲 (1937)
- 祝典箏協奏曲 (1940)
- 《歌曲》
- 秋の調 (1918)
- 浜木綿 (作詞: 宮城道雄) (1956)
- 《童曲》(子ども向け箏曲)
- 夜の大工さん (1926)
- チョコレイト (1928)
- ワンワンニャオニャオ (1931)

